社会福祉ニュース

2011/03/31

Contents

巻頭言	p.1
2010 年度活動紹介	p.3
2010 年度研究報告	p.5
2010 年度活動報告	p.6
2010 年度新着図書	p.7

≪巻頭言≫

システミック・リスクと新しい共同－大震災を経験して

所長　菅沼 隆

今回の大震災で亡くなられた方に哀悼の意を表するとともに、被災地の皆さまに心よりお見舞いを申し上げます。

私も、テレビに映ずる大津波の襲来を、何も出来ず見入るしかなかった自分に非力・無力を感じた。

今時の大震災の呼称は、本稿執筆時には定まっていない（マスコミは「東日本大震災」「東北関東大震災」が多いようである)。被災領域があまりにも広範であるためである。福島原発の危機が重なり、多重複合広域災害となっている。「2011 年 3 月 11 日大震災」はどのように呼ばれるにせよ、関東大震災とともに日本の歴史を変えた地震として日本が存続する限り語り継がれることになる。

１．システミック・リスクに立ち向かう

阪神大震災を画期として災害支援・災害福祉研究が盛んとなり、被災者支援の具体策については大いに発達してきた。今時の震災の被災者支援にもそのノウハウが生かされていることは明らかである。ここではそのような被災者支援の具体策を論じるのではなく、リスクをどのようにシェア・負担するべきなのか、について少し考えてみたい。

震災など自然災害は、筆者が専門としてきた社会保険が想定する確率論的リスクが適用できないリスクである。もちろん、地震保険が存在するように、地震リスクを対象とした保険は存在している。だが、それを確率論的に推計することは、無理がある。というのも、第１に、自然災害は個人や１世代の中で発生するものではなく、数百年数千年の期間の中で生起するのであり、合理的な個人や合理的な家族が合理的に予測できるものではない。第２に、人が自然災害を確率論に基づいて合理的に保険を選択する事例は多くない。第３に、リスクの影響が継続的波及的に及んでおり、被害の範囲と規模を詳細に確定することは事実上困難である。大規模な自然災害は確率論的なリスクではなく、その社会全体に影響を及ぼす「システミック・リスク」であり、保険数理が適用できるようなリスクではない。ただし、第４に、金融のシステミック・リスクの場合、マネーゲーム・投機といった人為を原因とするのに対し、今時の大震災の直接的原因はまったくの天災であり、人知を超えている。このため金融のシステミック・リスクとは性質が異なることも明らかである。

システミック・リスクは社会全体に被害を及ぼす。直接責任のない者に被害が及ぶ。この場合、社会全体でリスクを分かち合うしかない。この社会全体とは一国のみならず国際社会も含んでいる。システミック・リスクに対しては、リスクの波及・拡大を抑止する事前（防災）・事後（救援・復興）の対策が重要であるが、以下では事後の対策（復興）について考えたい。

２．復興と新しい共同

システミック・リスクは原状回復が難しい場合が多く、新しいシステム形成を伴うことが通常である。システム全体の回復ということを考慮すると、回復のプロセスと回復後の具体的なイメージ（新しいシステム）をリスクシェアしている諸主体の間で共有することが必要である。そのような共有する場を作ることは政治の役割になるが、プロセスと復興後のシステムイメージは諸主体の参加のもとで決められるべきであろう。

特に津波に襲われた地域は原状回復は不可能に近い。個人・法人が所有しているかつての土地に居住することは極めて難しいだろう。津波に強い町に作りかえる場合、高台に家屋や公共施設を建設することになるであろう。元の所有権を多かれ少なかれ制限せざるを得なくなってくる。戦後日本に強かった個人的土地所有の観念を大幅に修正する必要が出てくる。代わりに、居住していたという事実に基づく居住権・生活権が基本的な権利として保障されることになる。所有権がゼロになることはないが、比重を大幅に低下させることになる。それは一言でいえば、「所有権から生活権へ」ということになるであろう。この生活権は、その土地での活動に参加していたという事実のみに依拠することになる。

生活権から復興を構想しなければならない。誰もがゼロからのスタートなのだ。それはいわばロールズの「オリジナル・ポジション（原初的状態）」から社会を構想することに類似した思考作業･コミュニケーション過程が求められている。過去の所有にとらわれない、未来の自分たちの“善さ”を最適化するための対話である。自分のみならず、他者の 5 年後、10 年後、30 年後、x 年後を視野に入れた復興構想であることが望ましい。個別の私的利益を度外視した（超越した）、共同的利益を構想しなければならない。ロールズ的発想が必要なのである。

だが、他方で、被災された方は、老若男女、個別的で多様な来歴を有している。個別具体的な人的資本（知識・技能・教育など）、個別具体的な社会関係（家族、近隣、職場など）、個別具体的な身体的条件（体力、健康、性格など）を所有している。オリジナル・ポジションといいながら、皆個性的で互いに異なっているのだ。そこにはアマルティア・センのような個別的な可能的条件に配慮することも求められるのである。

となると復興計画は、私的所有権に一定の制約をはめたものでなければならない。個別の利害よりも共同性を基軸にしたものでなければならない。だが、多様な人的資源、社会関係、身体条件を有した具体的な個人を想定しなければならない。さらに、自立可能な地域経済の形成に資するものでなければならない。このように考えると、今時の震災の経験をもとに“新しい共同”を発展させるしかないと思われる。その条件は、老若男女が発言し、企画運営に参画しうる市民参加が字義通りに実現されることであると思われる。

まとめ

「システミック・リスク」という特性からみても、「所有権から生活権へ」という点からみても、「すべての当事者の対等な参加と対話と権利」がよりよい復興計画の必要条件となる。この大震災を契機に災害に強い町づくりとともに、新しい共同が形成されることを望む。それが被災地でない地域の町作りにも好影響をもたらすことを願う。それがこの震災の犠牲を無にしない態度ではないかと思われる。

≪2010 年度　活動紹介≫

第 32 回　社会福祉のフロンティア

「品格ある（ディーセント）社会に向けた新しいセーフティネットを構想する－『参加と連帯のセーフティネット』を語る」

田中聡一郎（立教大学経済学部助教・社会福祉研究所所員）

立教大学社会福祉研究所の第 32 回の社会福祉のフロンティアが、同志社大学社会福祉教育・研究支援センター後援を受けて、2010 年 12 月 17 日に開催された。今回の開催報告では、そのシンポジウムの様子をお伝えするとともに、シンポジウムの聴衆のひとりである倉地さんに感想を寄せていただいたので紹介したいと思う。

○　埋橋孝文　氏　（同志社大学社会学部教授）
「新たなセーフティネットの構築に向けて」
○　菅沼　隆　所長（本学経済学部教授、社会福祉研究所所長）
「参加保障型社会保険の提案」
○　山田篤裕　氏　（慶應義塾大学経済学部准教授）
「最低所得保障をめぐる課題－国際比較から「４層」のバランスを考える」

今回のシンポジウムの趣旨は、連合総研・埋橋孝文編（2010）『参加と連帯のセーフティネット』ミネルヴァ書房の新しい社会保障の総合的な構想・提言を議論するというものである。第 1 報告として、連合総研研究会の主査であった埋橋孝文氏から「四層構造のセーフティネット」という新しい社会保障体系についての報告があった。第 2 報告では、委員であった菅沼隆所長から、その提言の支柱をなす「参加保障型社会保険」についての具体的な提案がなされた。そして第 3 報告では、社会保障制度の実証分析と国際比較研究の第一人者である山田篤裕氏からは提言の意義と今後の論点について、コメントがなされた。

同書ではディーセントワーク（品格ある労働）の実現を基軸に、最低賃金、雇用政策、社会保険、給付付き税額控除、就労支援手当、住宅補助制度、地域セーフティネット、生活保護改革など具体的に提案しており、各報告後の報告者間の討論において、具体的な検証がなされた。特に、社会保険の適用拡大と社会手当の導入後の生活保護制度のあり方や、地方分権との関連、子ども手当をどのように考えるのか、さらにはこうした社会保障拡充に対する財源確保策（特に、保険料増大）に対する国民の意識等、活発な議論がなされた。聴衆のアンケートを見ても、報告のレベルが高く、また討議においても活発な議論を呼んだことを評価していただけたようである。今後も、社会福祉のフロンティアでは、社会福祉に関する新たな課題を積極的に取り上げていきたい。

シンポジウムを終えて

倉地真太郎（慶應義塾大学経済学部 4 年）

2010 年 12 月 17 日、立教大学にてシンポジウム「品格ある（ディーセント）社会に向けた新しいセーフティネットを構想する－『参加と連帯のセーフティネット』を語る」が開催されました。本シンポジウムの特徴は、昨今多くの課題を抱える日本の社会保障制度の現状を踏まえて、従来の個別的な社会保障の議論を超え、より体系的なセーフティネットとして具体的に提言を行う点にあります。様々な社会保障制度を総合的に捉えようとする試みは、社会保障論の本来の在り方であると実感をしたと共に、初学者である私にとって、今後の研究の礎となる貴重な機会を頂けたと考えております。以下では当日の討議を振り返って、勝手ではありますが、いくつか論点を私なりに整理させて頂きたいと思います。

当日のシンポジウムでは先生方のご報告を受けて、その後の討議では充実した議論が行われていましたが、それと同時に体系的な社会保障制度の在り方を考える上で、新たな課題が浮かび上がってきました。

第一に政策提言に伴う財源調達をどれだけの規模で、どこから財源を確保するかという問題は、昨今の日本の政治的状況も加味しなければならず、悩ましい点でもあります。もちろん提言された政策は社会保険を社会保障制度の支柱とすることで、保険料が税と比較して反対給付の性格を持つため、負担の増加に関して国民の理解が得られやすいという一定の配慮がなされています。しかし保険料引き上げにせよ増税にせよ国民の負担増は存在することから、一定の国民の反発は避けられないでしょう。

新たな社会保険制度の構築に向けて如何にして国民の理解を得るかという点は、第二の課題である社会保険制度における国民の「価値観」に密接に関連します。リーマン・ショック以降、派遣村を画期として労働者及び失業者の貧困問題が脚光を浴びるようになりました。しかし今なお、国民の中には「働かざるものは食うべからず」という価値観が根強く、様々な課題が山積している政治的状況を勘案すれば貧困問題の解決は国民のコンセンサスとは成り得ていない現状にあります。「価値観」の問題は政策デザインの枠外の話のように見えますが、政策提言が貧困問題の克服を前提にしている以上、今後も立ち向かうべき課題です。

以上のように財源問題と「価値観」の問題は、当日の討議でも中心となった論点でありましたが、これらは社会保障制度をトータルに捉えることで初めて現実的な問題として認識できたのではないでしょうか。その意味で、本シンポジウムは今後の社会保障論を議論する上で道標になったのではないかと、恐縮ながら述べさせていただきたいと思います。最後に、私のような若年者を本シンポジウムに参加させて頂き、さらにはこのような発言の機会を頂いたことを、この場を借りて心より感謝の意を申し上げます。

≪2010 年度　研究報告≫

活動報告　DIPEx-Japan データベースと二次分析

菅野摂子（立教大学他兼任講師・社会福祉研究所研究員）

現在の研究課題は、出生前検査をめぐる一連の問題群の整理、がん患者の語りデータベースを用いた医療情報と入手と治療選択の検討、小児科医療のニーズ（特に時間外診療）とその要因に関する分析の三点である。

本稿では二点目に挙げた課題について、がん患者の語りデータベースを簡単に紹介し、現在の研究状況を報告する。がん患者の語りデータベースを提供しているのは「健康と病いの語りディペックス・ジャパン」（通称：ディペックス・ジャパン）である。ディペックス・ジャパンは、英国オックスフォード大学で作られている DIPEx をモデルに、日本版の「健康と病いの語り」のデータベースを構築し、それを社会資源として活用していくことを目的として作られた。2009 年に東京都より特定非営利活動法人（NPO 法人）に承認されている。具体的には、病の経験者が自らの経験を語った「語り」のデータをアーカイブとし、本人の希望によって画像、音声、テキストで WEB 上に公開する。疾患ごとに 40~50 名のインタビュイーが語るが、居住地も含めてできるだけバリエーションを広げたデータを収集し、「治療の副作用」「仕事の継続」などトピックごとにも検索できるのが特徴である。ただし、現在サイトがオープンしている乳がんと前立腺がんのモジュールは、NPO 法人になる前に厚生労働省科学研究費補助金（がん臨床研究事業）を得て実施されている。私はこの時期から研究者として参加し、質的研究の勉強会をしながら、次第に乳がんのデータベースを二次利用した分析を行ないたいと考えるようになった。質的データの二次利用に関心を持ったのは次の理由からである。現在の質的研究のデータ（特に病気や障害に関するインタビューデータ）がさまざまな倫理的配慮によって取得しづらくなっていること、質的データは一般に取得する際のサンプリングの基準が曖昧で、かつ限定的にならざるを得ないこと、インタビュイーとの相互作用は調査を実施する上でも分析を行う上でも重要だが、相互作用を超えたところでも「語り」には大きな意味がありそれをひとつの研究として発表していく意義があると考えること、である。イギリスではすでに、質的データの二次利用が行われており、それを日本に紹介する文献も出版されている。

一昨年に 43 名分の乳がん患者の語りをテキストで提供されたが、二回の学会発表と一回の研究会での発表をとおして、対象とするデータを再発／遠隔転移の経験者 10 名に絞り込み、分析テーマもインタビュアーが積極的にたずねている情報入手と治療選択へと変更した。だが、実際に二次データを用いての分析は思ったほど容易ではない、というのが現在の正直な感想である。語っている人のイメージがつかめなかったり、テキストを何度読んでも腑に落ちない点は、その都度インタビュアーにたずねているが、それでも私が抱いている人物像から何か決定的なものが抜け落ちているのではないかという不安はぬぐいきれない。ただし、上記に記したように、それでもあふれ出てくる豊かな「語り」はやはり研究対象として複数の研究者に利用され多様な研究成果を出すことには意義を感じており、その思いが紆余曲折した長丁場を支えてきた。

研究としては、今まさにクライマックスを迎えている。分析手法として用いている M-GTA 研究会のアドバイザーに 3 月末から最終的なスーパーバイズを受ける予定である。研究結果がまとまったら、社会福祉研究所の研究会で発表の機会を頂けると幸いである。

≪2010 年度　活動報告≫

【連続公開講座　社会福祉のフロンティア】公開講座を開催しています。

第 32 回　品格ある（ディーセント）社会に向けた新しいセーフティネットを構想する
　　－『参加と連携のセーフティネット』を語る

日　時：2010 年 12 月 17 日（金）18：30～21：00

講　師：埋橋孝文 氏（同志社大学社会学部教授）
　　山田篤裕氏（慶應義塾大学経済学部准教授）
　　菅沼隆（立教大学経済学部教授、当研究所所長、）

司　会：田中聡一郎（立教大学経済学部助教、当研究所所員）

【セミナー】

第 18 回家族援助技術セミナー

テーマ：【初級】ソーシャルワーカーのための解決志向面接　～家族支援・協働参画を展開しよう～
　　【中級】ソーシャルワーカーのための解決志向面接
　　～ツールを活用して家族支援・協働参画を前進させよう～

日　時：【初級】2010 年 10 月 2 日（土）10：30～16：00
　　【中級】2010 年 10 月 16 日（土）10：00～16：00

講　師：安達 映子（立正大学准教授、当研究所所員）

第 1 回、第 2 回家族コミュニケーションセミナー

テーマ：①日頃の家族関係についてふり返ってみましょう
　　②家族関係を見直してみましょう―家族イメージ法（FIT）
　　③これからの家族関係を考えていきましょう

日　時：【第 1 回】2010 年 6 月 24 日、7 月 1 日、7 月 8 日（木）13：30～16：00
　　【第 2 回】2010 年 10 月 14 日、10 月 28 日、11 月 11 日（木）18：00～20：30

講　師：河東田誠子（日本家族心理学会・家族心理臨床研修センター、当研究所所員）

2010 年度日本福祉文化学会福祉文化セミナー（社会福祉研究所は後援）

テーマ：スウェーデンから学ぶ福祉文化

日　時：2010 年 11 月 13 日（土）10：00～17：10

講　師：石井バーグマン麻子氏（福井大学教授）
　　グスタフ・ストランデル氏（舞浜倶楽部総支配人）
　　河東田博（立教大学コミュニティ福祉学部教授、日本福祉文化学会会長、当研究所所員）

【研究会】　定期的に開催しています。学内院生への参加も呼びかけています。

第 1 回　労働と身体をめぐる一考察 『働く女性とマタニティ・ハラスメント』を中心に

日　時：2010 年 5 月 18 日

報告者：杉浦浩美（立教大学等兼任講師、当研究所研究員）

コメント：佐川佳南枝（立教大学大学院社会学研究科博士課程後期課程、当研究所研究員）、三具淳子（立教大学等兼任講師、研究員）、菅野摂子（立教大学等兼任講師、当研究所研究員）、深田耕一郎（立教大学大学院社会学研究科博士課程後期課程、当研究所研究員）

第２回　障害者年金に関する論点整理
日　時：2010 年 7 月 12 日
担当者：百瀬　優（高千穂大学人間科学部助教、当研究所研究員）
第３回
日　時：2011 年 1 月 29 日（土）
テーマ：デンマークの失業保険－失業金庫とフレクシキュリティー
担当者：菅沼隆（立教大学経済学部教授、当研究所所長）
テーマ：障害者とセーフティネット
担当者：田中聡一郎（立教大学経済学部助教、当研究所所員）
テーマ：十勝圏域における精神保健福祉領域の地域生活支援システムの構築の過程
担当者：酒本 知美（立教大学他兼任講師、当研究所研究員）

【コラボレイティヴ・ワークス研究会】
日　時：2010 年 4 月 28 日、5 月 26 日、6 月 23 日、7 月 21 日、9 月 29 日、10 月 20 日、11 月 24 日、12 月 15 日、2011 年 2 月 23 日の 19：00～21：00
社会福祉研究所主催家族援助技術セミナー修了者とコミュニティ福祉学部大学院修了者を対象に開催。

【科学研究費補助金　基盤（B）による活動】
社会福祉研究所の共同プロジェクト（研究代表者：庄司洋子所員）は 2 年目を迎えました。（2009 年度～2011 年度）。研究課題名は「自立とソーシャルワークの学際的研究」です。
3 つのユニットごとに研究を進めてきましたが、ユニットを横断した形でも連携を図ってきました。本年度の紀要には特集を組み、研究成果の一部を発表しています。

【新着図書情報】
2010 年度は、年間を通じての相談室の運営が再開されました。それに伴い、相談室用の図書を揃えていきました。（一般貸し出しは行っておりませんが、参考図書として閲覧できるように整備中です。）
また、故佐藤悦子所員が所蔵なさっていた書籍が研究所に寄贈されました。大学の図書館に収めると所については、一般貸し出しをいたします。図書のリストは、研究所のホームページでご確認いただけます。また、すでに大学の図書館に登録されている書籍については、広く一般の方にお譲りしています。ご関心のある方は、事務局までお問い合わせください。

〔雑誌〕＊は定期購読
『質的心理研究　第 9 号』　新曜社＊
『社会福祉研究　107－109』　鉄道弘済会＊
『介護福祉学　17 巻 1 号、2 号』　日本介護福祉学会＊
『子どもの虐待とネグレクト　第 12 巻 1 号－3 号（通巻 28－30）』　日本子どもの虐待防止研究会＊

〔書籍〕
神奈川県社会復帰援護会社会復帰ニード調査委員会．1994『川崎市に在住する精神障害者の社会復帰・社会福祉の現状と必要な援助施策』
厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部．2008『平成 18 年度身体障害児・者実態調査結果』
兵庫縣社會福祉研究所．1949『神戸市に於ける浮浪者の実態調査』

〔DVD〕

キム・ミレ監督．2009.『外泊』韓国，日本語字幕付（日本語字幕制作：FAV連連影展）

〔相談室図書〕

高橋三郎.2003.『DSM-Ⅳ－TR精神疾患の分類と診断の手引き新訂版』医学書院
融道男監訳.2005.『ICD-10精神および行動の障害臨床記述と診断ガイドライン新訂版』医学書院
氏原寛他訳.2006.『心理検査実践ハンドブック』創元社
小此木啓吾他編．2004.『心の臨床家のための必携精神医学ハンドブック』創元社
融道男.2008.『向精神薬マニュアル第2版』医学書院
恩田彰.1999.『臨床心理学辞典』八千代出版
日本心理学会監修.1999.『家族心理学事典』金子書房
下園壮太.2006.『うつ・自殺予防マニュアル』河出書房新社
亀口憲治.2000.『家族臨床心理学　子どもの問題を家族で解決する』東京大学出版
亀口憲治編著.『心理療法プリマーズ　家族療法』ミネルヴァ書房
平木典子.1998.『シリーズ「心理臨床セミナー」②家族との心理臨床初心者のために』垣内出版
平木典子.2003.『カウンセリング・スキルを学ぶ』金剛出版
平木典子，柏木恵子.2009.『家族の心はいま　研究と臨床の対話から』東京大学出版
平木典子.2000.『自己カウンセリングとアサーションのすすめ』金子出版
中村伸一，中釜洋子監訳.2010.『家族・夫婦面接のための４ステップ』金剛出版
中釜洋子.2001.『シリーズ「心理臨床セミナー」⑤いま家族援助が求められるとき　家族への支援・家族との問題解決』垣内出版
日本家族心理学会編.2004.『家族心理学年報22　家族内コミュニケーション―こころをことばの力』金子書房
日本家族心理学会編．2010.『家族心理学年報 28　家族にしのびよる非行・犯罪　その現実御心理援助』金子書房
森俊夫，菊池安希子訳.1995.『ミルトン・エリクソン入門』金剛出版
森俊夫，黒沢幸子.2002.『＜森・黒沢のワークショップで学ぶ＞解決志向ブリーフセラピー』ほんの森出版社
黒沢幸子.2008.『タイムマシン心理療法 未来・解決志向のブリーフセラピー』日本評論社
小森康永，上田牧子訳.2003.『ナラティブ・セラピーって何？』金剛出版
東豊.1993.『セラピスト入門　システムズアプローチへの招待』日本評論社
団史朗.2006.『家族の練習帳―木陰の物語(1)』ホンブロック
斎藤環.2002.『ひきこもり救出マニュアル』PHP研究所
山口律子.2002.『「家族力」がうつから救う！』宝島社
大野裕.2003.『こころが晴れるノート』創元社
野村総一郎監修.2002.『「うつ」に陥っているあなたへ』講談社
伊藤順一郎監修.2003.『統合失調症　正しい理解と治療法』講談社
貝谷久宣監修.2006.『社会不安障害のすべてがわかる本』講談社
市橋秀夫監修.2006.『パーソナリティ障害（人格障害）のことがよくわかる本』講談社
渡辺登監修.2007.『依存症のすべてがわかる本』
村山昇.2007.『“働く”をじっくりみつめなおすための18講義』明日香出版社
宮城まり子.2002.『キャリアカウンセリング』駿河台出版社
宮城まり子.2007.『成功をつかむための自己分析　自分らしさを最大限に生かす』駿河台出版社
向谷地生良．2008.『べてるな人びと　第1集』一麦出版社

【発行】立教大学社会福祉研究所
〒171-8501　東京都豊島区西池袋3-34-1
http://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/ISW/index.html